

最新事情

「大商」ならではの商業教育で、
社会に有益な人材を送り出す

滋賀県立大津商業高等学校

(滋賀県大津市)

滋賀県立大津商業高等学校は、地元で「大商」という呼び名で親しまれている商業高校だ。創立112年の歴史と伝統を守りながら、「総合実践」など商業高校ならではの授業を展開している。学科は総合ビジネス科と情報システム科の二つ。両学科の3年生が受講する「課題研究」の講座「ビジネスマナー講座」で導入している秘書検定の取り組みを中心に伺った。



平成29年度に赴任したばかりの今井義尚校長。校内でのコミュニケーションを大切にしており、生徒や教員に積極的に声を掛けている

滋賀県立大津商業高等学校。「こんにちは!」という生徒の元気なあいさつが校内に響く

基礎力・実践力の教育と、 人づくりを重視

琵琶湖の南西に位置する滋賀県大津市。滋賀県立大津商業高等学校は、県内に2校ある商業高校の1校だ。創立は明治38年で、100年以上にわたりこの地域の商業教育を支えてきた。「本校には商業のプロフェッショナルを育成する」という大きな使命がある」と話すのは今井義尚校長だ。平成29年度に赴任したばかりだが、すでに学校のリーダーとして溶け込んでいる。「毎日、各部活の朝練を見てから校門に立つのが日課です。登校する生徒を待っていると、『校長先生、おはようございます』と声を掛けてくれます。寒いときは『風邪をひいていませんか』

と気に掛けてくれます。普段の生活の中で、一言二言交わせるのはよいことです。こういうコミュニケーションは人づくりに必要不可欠。私も積極的に生徒、教員に声を掛けています。」
「人づくり」は、同校の商業教育を語る上で欠かせないキーワードだ。教育で大切に行っていることを今井校長に伺った。

「社会に必要な基礎力、社会で通用する実践力の育成、人づくり。この三つを教員間で共有して教育に取り組んでいます。基礎力は商業・情報処理の専門知識を生かすために必要な力です。専門知識をより確かなものにするためには実践力が重要。社会で使えなければ意味がない」と話し、人づくりについてこう続ける。

「社会のさまざまな場面、ロボットやAIが出てきています。将来なくなると予想されている職業もある。しかしロボットが人間の代わりに仕事ができたとしても、人としての在り方や心構えは人間社会の根幹に関わることであると思うのです。倫理観やマナー、あいさつなど、人として大事な部分を教育する人づくりが欠かせないと考えます。」

今井校長の教育に対する熱意は、「大津商業改革プロジェクト」の実施にもつながっている。今井校長は赴任後、全教員を対象に、大商の教育についてアンケートを実施した。そこでは、「生徒の可能性を引き出せていない気がする」「能力が頭打ちになってきている。もっと力を伸ばしてあげたい」などの課題が出てきたという。

(左から) 杉本祐紀先生、田中正春先生、森川雅子先生。同校の卒業生である田中先生と森川先生は課題研究の「ビジネスマナー講座」を担当。生徒の情報を共有したり、指導法を試行錯誤している



「教員60名が小グループに分かれてディスカッションを行い、課題を話し合いました。集約した課題は、各部署に改善点を提言します。例えば商業科目の担当者には、『より高いレベルの検定や資格試験に挑戦させたらどうか』と提案。そこで1月は検定・資格取得の強化月間とし、授業や補習でサポートすることが決まりました。現在、取り組みの真っ最中です。生徒に、『商業高校に来てよかった』と言って卒業してもらいたいです。そのためにも改革プロジェクトを進めていきたい」。

学んだことは現場で生かすことに意味がある

商業高校での学びを社会で生かせるよう、特徴的な授業を展開する同校。今回は3年生の「総合実践」と「課題研究」について紹介する。「総合実践」は、商業高校ならではの科目だ。1年生のときから簿記や会計をはじめ、ビジネスマナーなどを学ぶが、各科目の関連性を理解するのは難しい。それを可能にするのが総合実践の授業であり、商業の学びの集大成となる。

授業を見学した。会計ソフトが入ったPCが幾つも並ぶ実習室は、「東京市場」と「大津市場」に分かれている。授業には10名の教員が入り、

生徒をフォロー。担当教員の一人である田中正春先生は狙いをこう話す。

「社員3〜4名の商社を設立し、模擬取引を行います。実践を通して各科目の学びがつながることを理解し、問題解決能力、情報を解明・分析する力などを身に付けるのが狙いです」。

授業の始まりと終わりには必ずお辞儀をします。「よろしくお願ひいたします」「ありがとうございました」と言った後に、3秒間礼をすること(分離礼)を徹底している。

「社会人に必要とされる態度、立ち居振る舞いを身に付けるのも大事なことです。あいさつ、明るい態度で接すること、手際がよい応対を心掛けることは、企業の一員であるという自覚にもつながります。この意識があれば、すんなりと実社会に溶け込めると思います」(田中先生)。

実践力に限らず、社会人に必要な心構えの習得にも通じる「総合実践」は、同校の商業教育には欠かせない科目となっている。

もう一つ、特徴的な学びが「課題研究」だ。15ある講座の中で特に人気なのが「ビジネスマナー講座」。受講者の数は118名と、学年の半数近くに上り、今年度は4クラスに分かれ指導している。クラスを一つ受け持つ田中先生が授業内容を詳しく教えてくれた。

「6月に秘書検定を受験させています。生徒は2級と3級の内容を見て、受験する級を決めます。試験終了後は、茶道やフラワーアレンジメントの講師を招き、講習会を開催しています。

2学期は調べ学習が中心で、婚葬祭や海外のマナーなど、好きなテーマについて調査し、資料をまとめます。一年を通して、マナーについて広く学ぶことができる講座です」。

秘書検定は6月の試験に向けて、集中して学習する。指導法はクラスごとに異なるそうだ。

「私のクラスでは実技の内容を中心に解説することが多いです。ビジネス電話の受け方、ビジネス文書の書き方、郵便の出し方など、参考書を読んで理解したつもりでも、実際にやってみるとスムーズにできないもの。実技は可能な限り、実際に生徒に体験させています。その方が身に付くスピードも早いです」(田中先生)。

他の教員はどうか。森川雅子先生に伺った。「実問題集を中心に学習しています。生徒から質問があった問題は詳しく解説します。質問が多いのは、やはり実技の問題です。例えばビジネス文書の書き方。特に文章の構成や言い回し



(左)「総合実践」では、授業の始めと終わりにお辞儀をする
(下)東京市場と大津市場に分かれ、模擬取引を実施



(左から) 総合ビジネス科3年生の野村美公さんと、東江華帆さんは秘書検定2級に合格。「知識だけでなく、コミュニケーションスキルも習得できたと思う」と手応えを聞かせてくれた



が難しいと感じるようです。保護者宛ての文書などを例にして、『拝啓、敬具を使い、記書きになっているね』と説明しています。身近にある文書で説明すると、理解しやすいようです。

指導法や解説のポイントはそれぞれ異なるが、実際に使える知識を習得してほしいという思いは同じ。各教員が指導に工夫を凝らしている。

〆視点や考え方が変わった〆 高まる社会への意識

「ビジネスマナー講座」を受講する東江華帆さんと野村美公さんは、平成29年6月に秘書検定2級に挑戦し、合格した。

「初めて知ったのが席次です。上座、下座という言葉も読み方も知らなかったので勉強になりました。車では助手席が一番よいのかと思ったり間違いで驚きました。特に難しかったのが言葉遣いです。敬語は暗記に苦労しました」と話す東江さんの横で野村さんもうなずく。

「敬語は〆お〆か〆を付ければよいと思っていたのですが、大きな間違いでした。一つ一つ覚えるしかないのです、頑張つて暗記しました。不適當を選ぶ問題は、選択肢が全て適當に思えてしまい、不適當を見極めるのが難しかったです」と振り返り、秘書検定の学習を通して変化したことを、こう話してくれた。

「視点、考え方が変わった気がします。例えば上司が体調が悪そうなときや、部下を指導するときに、秘書として、先輩としてふさわしい対応が勉強になりました。秘書検定の学習を通して、仕事をする上で必要なコミュニケーション全般を学ぶことができたと思います。」

秘書検定の挑戦を通し、学びを深めた東江さんと野村さん。二人とも卒業後は進学する予定だ。栄養士を目指す東江さんは「栄養士はいろいろな人と接することが多いと思うので、人間関係を築くときに生かしていきたいです」と抱負を聞かせてくれた。

指導を担当する田中先生は、「ビジネスマナー講座で秘書検定を導入した理由は、コミュニケーション、思いやりが学べるからです。秘書検定と聞くと秘書の仕事内容が思い浮かびますが、それだけではありません。人として大事な部分が理解できていないと、解けない問題がたくさんあります。人づくりを重視する本校の教育に、秘書検定は適していると思います」と、その内容を高く評価する。

「課題研究」にはまだまだ興味深い講座がある。「プレゼンテーション講座」では地域活動に参加。琵琶湖に浮かぶ沖島と連携し、滋賀県の特産品である鮎寿司を使ったピザのパッケージをデザインした。担当教員は杉本祐紀先生だ。

「こだわったのがパッケージの色です。使う色によって、与える印象が変わってきます。校内で調査を実施した結果、青をメインで使うこと

にしました。琵琶湖のイメージと、鮎寿司はおいがきついイメージがあるので、爽やかな印象を与えるためです。この講座では、学校ではできない体験をすることが出来ます。漁師や販売店の方など、いろいろな人と交流することでコミュニケーションの重要性を実感します。」

さまざまな取り組みで、生徒の成長を支える大商の学び。今井校長は改革の手を緩めず、教員とともに突き進んでいく考えだ。

「大商で学んだ基礎的なこと、実践的なこと、人として大切なこと。ここでの学びを生かせば、どこに行っても活躍できると思います。社会に貢献できる有益な人材になって巣立ってほしいのです。改革を続け、『大商を卒業してよかった』と言ってもらえる学校にしていきたいと決意しています。」

「ビジネスマナー講座」では、秘書検定の学習に限らず、茶道やフラワーアレンジメントも学ぶ。「テーブルマナーも実施します。マナーは身に付けば得ることを理解して学習してほしい」と田中先生は願いを込める

